

国際会議に慣れる3段階

情報化社会のCSRナビゲータ くりさき 栗崎 よしこ 由子



私は日本のNTT在勤時代より、パリを経てジュネーブに在住する今に至るまで、多国籍企業、国際機関に勤務しながら国際会議を多数経験してきました。また、個人的関心から、国際NGO活動にも参加しています。その間20年強、様々な文化を持つ人々と一緒に仕事を進める経験を、実地に積んで参りました。その経験を、今国際ビジネスの現場に出ようとする方たちのご参考にしていただければ、心から幸いに存じます。

私がITUの会議出席のため年に二回ジュネーブに行くようになった頃のことです。ある通信業界の新聞のコラムで、国際会議参加者には発展三段階がある、という説を読んで、大変納得したことがあります。第一段階は、必死で議論についていだけで精一杯の時期。第二段階になると、自分の意見を言えるようになる。さらに会議に慣れると、自分の意見だけでなく、会議の進行全体に貢献するような発言ができるようになる。これが第三段階。私自身の経験に照らしても言い得て妙だと思います。

1985年3月、初めてITUの会議に出席しました。国際会議場ロビーに整然と並ぶ、個人に割り当てられる郵便箱（ビジョンホール、“鳩の巣”と呼ぶそうです）に感心し、会議場の広さに圧倒されました。会議が始まると、会議特有の用語には不慣れで、周りの参加者の誰も知らず、ひたすらノートを取るだけで精一杯でした。出席回数を重ね、徐々に会議に慣れてくると、担当課題については、議論の内容や流れがだんだん分かるようになります。そうすると、「ここでは〇〇を言わなくちゃ」という機会も出てきて、私も少しずつ発言するようになりました。また、自分の発言できる会議の規模も変化してきました。初めは、テーマを良く理解でき、その上少人数のワーキンググループで、しばらくしてから、三桁の人数が集まる全体会で、というように。短い発言でも、十分に内容を考え、手元に英語のメモを作る——しっかり準備してから手を挙げる習慣ができてきたのもその頃です。

幸い英語で話すこと自体には抵抗がなかったため、第二段階の入り口には、3回目ぐらいの会議で行き着いたと思います。それでも、発言が終わった途端、自分の言ったことは皆に通じたか、言いたいことを全て、整然と言えたかなどと、



写真、国際会議の様子（写真は本文とは関係ありません）

自問ばかりしていました。第三段階まで行くには、少し時間をかけて飛躍する必要がありました。会議の進行に貢献する、議事が円滑に進むような提案ができるためには、一段高い目線を持って会議全体を見渡していなければならないし、また、その会議の持つ空気にも充分慣れている必要があるからです。議論の内容の理解はもちろん、会議の常連参加者となじみができ、ある程度の信頼関係ができていること、また、会議特有の手順もある程度分かっていると、なかなかこういう発言をする度胸はできないものです。私もそうですが、日本人は、学生時代から社会人になるまで、残念ながら議論によるコミュニケーションの練習を十分に積んできているとは言えないと思います。そのため、会議に慣れていないと、こういう発言はなかなかしにくいのではないのでしょうか。けれども、その心の壁を乗り越えてこの段階まで来ると、自分が国際会議を進めるために出席する他の人々と一緒に仕事をしているという実感が湧いてきて、楽しくなるものです。国際会議もまた、「習うより慣れよ」ですね。いろいろな場所で経験を積むにつれ、多様なニュアンスを使い分けて発言できるようになります。これはもう、「慣れ」の功績です。そのためにも、同じ会議に参加する他の人々と、休憩時間などを利用して、たわいない話であれ何であれ、話しをして、互いに知り合っておくことは、自分の心の緊張を和らげるために、大変役に立ちました。そのことについては、また後日、稿を改めて書くことにしましょう。